

玉井隆氏から提出された博士学位請求論文『アフリカ都市貧困地区における生物医療の展開と住民の治療ネットワーク形成に関する研究-ナイジェリア・ラゴス州エグンのマラリア対処を事例に-』は、サハラ以南アフリカの都市貧困層における、マラリアという病いへの対処をめぐる行動原理と、それにかかわる社会関係の形成過程を明らかにすることを目的とした論文である。研究の対象は、ナイジェリア・ラゴス州の貧困地区マココで暮らすエグンと呼ばれる民族集団である。方法的には民族誌的アプローチに依拠し、ナイジェリアと、エグンの出身地である隣国ベナンで行われた住民へのインタビューと参与観察を主とするフィールド調査から得られたデータに基づいた記述と分析が行われており、極めて独創性に富んだ論文として高く評価できるものである。

本論文は、研究の枠組みを提示する第1部、研究対象であるマココ地区のエグンの歴史、民族、開発を扱った第2部、マラリア対処のための治療ネットワークの形成を扱った第3部からなり、全10章で構成されている。

第1部（1～3章）において、まず第1章では、本研究の問題の所在を明らかにしている。今日のアフリカ諸社会では、生物医療が人びとの日常生活にまで広く浸透しているものの、その展開は様々ではない。アフリカでは、国家の保健医療システムが脆弱であり、代わって国際機関や各国の政府系援助機関、NGO、民間企業などによる支援の下で、医療サービスが人びとに提供されている。本論文では、生物医療に対する信頼は必ずしも絶対的ではないことを従来の前提とは異なる見方として提示する。そして、医療者と病者の個別具体的な関係に応じて、病者は、その医療者から治療を受けるか否かを模索していることを明らかにするとしている。第2章では、先行研究を検討し、アフリカにおける民族間関係が病者の行動にいかに関与しているのか、また病者が治療を模索する場合における社会関係が、民族的境界の「外部」とつながらない理由がほとんど検討されていない点を示し、本論でこの点を検討する方向性を示している。第3章では、本研究が着目するマラリアについて、その基礎的な情報と政策的な動向を概観している。

第2部（4～5章）では、まず第4章で、本研究の調査地と対象を明らかにしている。具体的には、ラゴス州のマジョリティであるヨルバとの間の民族的境界の形成過程を中心に検討している。ここでは、隣国ベナン出身の多様な人々がマココ地区においてエグンと「なり」、できる限りヨルバと交わることなく日常世界を築くことができるのは、移動可能な「平和」な故郷に生活のつながりを広げつつ、他者たるヨルバと対峙するからであることが提示される。第5章では、民族的境界がある中で、エグン同士の関係を重視した日常生活がどのように実践されているのかを検討している。ここで明らかになるのは、短期で小規模な、保健医療や教育を中心とする社会サービスを補うため、NGOや個人により断片的に行われている支援にエグンの人びとが半ば偶然に出会い、またエグン同士による様々な共助（ウベ）を行い、日常生活を成り立たせるための実践を行っていることである。

第3部（6～10章）では、まず第6章で調査地であるマココ地区とその周辺における生物医療の展開について、具体的に記述している。第7章は、エグンの人びとがオバ（ova）とよぶマラ

リア認識を明らかにする章である。ここで明らかにしているのは、(1) エグンのマラリア対処はその症状の深刻さと変化に応じて、自家治療、エグン居住区内における医療施設での治療、故郷に移動しての治療という3つの段階があること、(2) 治療を選択する場合に、エグン居住区外の、エグンが運営するのではない医療施設の利用を忌避しまた利用しないこと、(3) 症状が深刻な場合やエグン居住区内の医療施設で対処できない場合には、故郷に帰還してマラリアに対処すること、の3点である。第8章では、こうした行動の背景を1980年代に遡って検討するとともに、マココ地区内外の私立医療施設の数やNGOの支援が増加する1990年代～2000年代において、マラリア対処の選択肢が広がると共に、それがエグン同士の関係を重視したものへと変化した過程が描かれている。その背景にヨルバに対する認識と関係の変化が指摘され、エグンが治療ネットワークを駆使し、臨機応変に「治療を渡り歩く」ことでマラリアに対処する動態を示している。第9章では、エグンとヨルバ間の民族的境界を乗り越えマラリアに対処することができた稀有な3つの事例を検討している。ここでの事例もエグンとヨルバ間の直接的なかわりが、民族的境界を越える契機となっていることが導出されるものの、例外的な条件が多く、民族的境界を越えた病いに対する治療の模索は困難であることが改めて確認される。第10章では結論が述べられている。それは以下のようなものである。エグンの人びとにとって、生物医療に基づく医療実践は、常に何であれ信頼できるものではない。エグンの人びとが問題にするのは、その医療サービスが何で、どのようなものかではなく、それが誰によって提供されるのかという点である。従って彼らは、そのとき、その場にいるエグン同士の関係を伝って治療を渡り歩きながら模索する。これはエグン居住区内における医療施設が安定的でないにせよ多数あり、また故郷との密な結びつきを持つからこそ形成される治療ネットワークに基づいている。より一般化した表現に置き直すと、次のような結論が提示されている。アフリカ都市貧困地区における人びとは、治療を享受する場合におけるリスクやコストを減減するために、当該社会における社会関係の形成過程に応じて治療を探求する。そして、人びとは個別具体的な社会関係に基づき、病いの対処の方策を柔軟に模索するために治療ネットワークを形成する。それは彼らの生存を担保するために必要な人びとの関係性がそこに形成されているということである。

本論文は以下のような点できわめて大きな学術的な貢献が見られる。第一に、グローバル・ヘルスが展開する「現場」におけるマラリアを事例とした医療ネットワークの民族誌として重要な価値を持つ点である。この点は第二の貢献とも関連する。それは、これまでの医療人類学研究で十分に考慮されることの無かった民族間関係（本論文では民族的境界）を主題とした新たな事例分析を提供している点である。通常は特定の民族内での治療実践に着目されがちである傾向に新しい知見を提起することに成功している。そして第三に、これまで治安状態の問題などにもより、ほとんど研究されることの無かったナイジェリアのスラムであるマココ地区に関する現地調査を踏まえた研究であるということである。

ただし、本論文にも問題がないわけではない。治療ネットワークを論ずる際に、ルーマンの提起するシステム信頼と人格的信頼の議論を援用しているものの、信頼、あるいは社会関係資本といった理論的な問題との関連について、必ずしも十分に踏み込んだ検討が行われていない点が指摘された。また、本研究のネットワークの形成が、本論文の対象となる疾病であるマラリアに固有のものであるのかという疑念が示されたほか、オバ（ova）に対する民族誌的考察を深める必要性も指摘された。

しかし、こうした指摘は今後の研究課題を示すものであり、本論文の価値を損なうもので

はない。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。